

中国語可能表現の習得状況に関する考察 : 大学における調査結果を中心に

著者	吉田 泰謙, 安本 真弓
雑誌名	研究論集
巻	108
ページ	151-168
発行年	2018-09
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00007825/

中国語可能表現の習得状況に関する考察

— 大学における調査結果を中心に* —

吉 田 泰 謙

安 本 真 弓

要 旨

本稿は「現代中国語における可能表現の学習効果—導入及び習得データに基づく実証分析」(研究代表者:安本真弓)の一環として、日本人大学生を対象に実施した中国語可能表現習得状況の測定テスト調査に基づき、現行の中国語教科書に記載されている中国語可能表現に関する解説及び用例による習得状況の考察を視野に入れながら、中国語可能表現の習得状況に関する問題点を「インプット処理(input processing)研究」からのアプローチを中心に分析することを目的とする。また、測定テスト調査結果のデータ分析及び第二言語習得理論で指摘される誤用タイプなどを踏まえたうえで、今後教科書指導のなかで導入すべき可能助動詞“能”、“会”、“可以”及び可能補語に関する「理解可能なインプット」を考案する際に、それぞれ配慮すべき点を明示する。

キーワード:中国語可能表現、習得状況、測定テスト、誤用分析、インプット

1 はじめに

本稿では、「現代中国語における可能表現の学習効果—導入及び習得データに基づく実証分析」(研究代表者:安本真弓)¹⁾の一環として、研究プロジェクト初年度にあたる2017年度に日本の大学で学習する大学生を対象に実施した、中国語可能表現に関する習得状況を調査することを目的とした小規模的な測定テスト(以下、「中国語可能表現調査」と呼ぶ)に基づき、中国語学習者の可能表現に関する習得過程における誤用を中心に分析及び考察を行い、教科書指導のなかで導入すべき、可能助動詞及び可能補語に関する「理解可能なインプット」を考案していくなかで配慮すべき点を明示したい。

中国語可能表現の習得状況に関する先行研究では、①作文における誤用例からの考察で「可能助動詞の欠落」、「語順の誤り」、「誤添加」、「混合使用のパターン」といった現象が存在する(張麗2008)、②上級レベルの学習者を対象に実施したアンケート調査からは「同じ動詞で複数

の可能補語フレーズが出来るものの習得状況がいまひとつ」、「二音節動詞の場合、どのように組み合わせたらよいかわからず、可能補語表現の使用を避けて通る」といった傾向がある（鄧凌志2013）、③日本人学習者（20～30代女性、計4名）を対象に行った縦断的研究と誤用例分析からは「様々な動詞を使った可能補語がうまく使えない」（藤井玲子2004）、といったことなどが指摘されている。また、母語の干渉による誤用も観察されていることから、それをできる限り排除する教授法を提示する必要がある（陈若凡2002）こともわかっている。

これまでの研究動向としては、上記の通り、おもに「可能補語」を中心とする考察が行われてきたが、「助動詞及び補語からなる中国語可能表現」といったより包括的な枠組みでの習得状況に関して、日本の大学における中国語学習者を対象に行った²⁾一定規模の横断的・縦断的調査及び分析³⁾はあまり見受けられないように思われる。また、大学レベルにおける第二言語教育プログラムを成功させるためには「理解可能なインプット」を入門学習時点から第二言語学習者に与えることが望ましい（レスリー1998：123、パッツィ/ニーナ2014：163）との指摘がなされている点なども踏まえ、本稿では、研究初年度として小規模的に実施した横断的な中国語可能表現調査（「3.1 調査対象と方法」を参照）に基づき、現行の中国語教科書（おもに日本の大学で採用されているもの）で一般的に記述されている中国語可能表現に関する解説や用例（以下、「現行インプット」と呼ぶ）のもとでの習得状況の考察も視野に入れつつ、「インプット処理（input processing）研究」⁴⁾からのアプローチによる分析を試みる⁵⁾。

2 理論的枠組み

2.1 第二言語における「習得」と「学習」

白畑等（2010：30）によれば、第二言語を身に付けるときにつきの二通りのパターンがあるとされる。

- ①他者との自然なコミュニケーションを通して言語を無意識に身に付ける「習得」
- ②教室で文法指導などを受けて意識的に身に付ける「学習」

本稿では、②の文法指導などを受けて身に付ける「学習」、それも日本の大学における中国語授業（教室指導）での中国語可能表現「学習」状況を調査し、誤用分析⁶⁾を中心に行う。

2.2 誤用の種類

第二言語学習者の内的メカニズムでどのような言語習得が行われ、それをコミュニケーションのなかでどのように運用しているのかについては、一般につきの4点に関わっていると言われる。①第一言語（母語）からの知識の転移、②新たなインプットが行われた後、既存の第二言語に関する知識構造を再構築させる普遍的なプロセス、③言語の普遍性に基づいた生得的知識

の利用、④第二言語の知識を運用するプロセス、とくにコミュニケーション・プロセス（ロッド1996:15）。これらを踏まえて考えると、誤用の種類にはおもにつきの4タイプが挙げられる。

(1) 母語転移による誤用

母語転移による誤用とは、第二言語学習者が言語習得の過程で、母語知識をベースとした思考パターンに基づく表現慣習を目標言語にもそのまま取り入れてしまう、つまり学習者が母語の文法規則を目標言語にそのまま転移してしまうことによって生じる言語表現の誤りを指す。孟国（2011:217）によれば、第二言語習得の過程において生じる誤用の約30%が学習者の母語干渉によるもので、とくに学習初期段階でより顕著に現れる、といった心理言語学による研究結果もある。

(2) 目標言語の文法規則からの転移による誤用

これは「過剰般化（overgeneralization）」と言われる現象で、目標言語となる第二言語のある文法規則を、本来適用すべきではない、他の文法項目にまで拡張することによって生じる誤用を指す。たとえば、ある文法規則を習得した後にその文法形式だけに着目し、意味的制約や表現機能を無視してしまった結果、不適切な類推となり生じる誤用などがその一例である（周小兵等2007:58）。

(3) 学習ストラテジーによる誤用

これはとくに学習者がコミュニケーションを行う場面で頻繁に見受けられる現象（誤用）で、学習者にとって目標言語のインプット量が過剰な状態となり、一時的に消化吸収が困難な場合に学習者自身が多く規則を簡略化してしまうことによって生じる誤用を指す。王建勤（1994:108）の指摘によれば、こうした学習ストラテジーは第二言語学習者によくある思考活動で、たとえば、学習者がコミュニケーションを行う実際の場面において意思疎通にさほど大きな影響を及ぼさないと感じる機能語などに対する学習行為を疎かにしがちにするのがその一例である。こうした機能語の欠落については、学習者がより円滑なコミュニケーションを図ろうと言いよどみなどを避けるために、その注意が言語形式でなく、会話内容（意味理解）に向いている際にとくに顕著に現れることもわかっている。

(4) 指導内容によって誘発される誤用

このタイプの誤用は、本来学習者自身が不適切な類推を行うことにより生じるものだが、一方で、こうした不適切な類推がなされてしまうもう1つの要因として、指導内容や教授法に関する問題点も挙げられる。この点については、つぎのような指摘がある。第二言語学習指導において、学習大綱、教材内容、導入順序、教員による指導が学習者の内的メカニズムと一致するならばその第二言語学習は一層促進されるが、かりに教員による説明や指導が適切に行われず、また教材による学習内容に適切な解説や用例がなく、導入順序も非合理的で体系的でないとするならば、学習者の第二言語学習に対する不安がより一層深まり、誤用が生じる結果とな

る（孟国2011：219）。

本稿では、上記の誤用タイプを誤用分析における指標として捉え、中国語可能表現調査をもとにデータ分析を行う。

3 測定テストによる調査及び分析結果

3.1 調査対象と方法

今回実施した測定テストの調査対象と方法は、つぎの通りである。

- ・日本の大学で教室指導のもと中国語を学習する大学生（計536名）を対象に、中国語可能表現習得状況を把握するための測定テストを実施した⁷⁾。
- ・測定テスト（筆者作成）は「助動詞のみ」（付録資料Ⅰ）と「助動詞と補語」（付録資料Ⅱ）⁸⁾を用意し、学年やクラス毎の学習内容及び進捗状況等に応じて、どちらか一方のみを授業内で受験してもらった。
- ・今回の調査は横断的にデータを収集する方法（長期間データを取らず、一度の調査で多くの被験者からデータを収集する手法）を取った。

こうした調査によって収集したデータの分析から、第二言語学習者が中国語可能表現を習得する過程において、その難点はどこにあるのか、また母語の日本語がどう干渉しているかなどを考察し、今後教科書指導で導入すべく「理解可能なインプット」に関する初歩的な知見を述べる。

3.2 「助動詞のみ」測定テストの結果とデータ分析

3.2.1 「助動詞のみ」測定テストについて

「助動詞のみ」の測定テストは、助動詞のみが使用可能となる言語環境における中国語可能表現運用能力を測定することを目的に、つぎの要領で作成した。

- ・中国語学習期間1年未満の学習者を想定して作問した。
- ・可能助動詞は“能”、“会”、“可以”に限定して作問した。これは“能”、“会”、“可以”が①中国語可能表現のなかで代表的な助動詞であること、②日本で刊行されている多くの初級中国語教科書でほぼ取り上げられていること、③《学汉语》编辑部编（2012）のなかで、中国語学習者にとって習得が難しい文法項目の1つとして挙げられていること、などの理由によるものである。
- ・被験者の中国語運用能力をできるだけ如実に反映させるため、各設問の正解は1つだけとは限らないよう作問した。つまり、正解が選択肢のなかで1つだけのものと複数あるものを織り交ぜた（以下、前者を「単一正答」問題、後者を「複数正答」問題と呼ぶ）。

なお、可能助動詞の「現行インプット」については、つぎのように記述されていることが多い。

- ・“能”：能力や客観的条件があって「～できる」
- ・“会”：技能を習得して「～できる」
- ・“可以”：「～してもよい」、「～してよしい」

この点を踏まえ、「助動詞のみ」測定テスト（10クラス分、被験者総数221名、学習状況としては週1-4コマのクラスを約8か月受講）の結果を集計したデータをもとに分析と考察を進める⁹⁾。

3.2.2 集計結果とデータ分析

「助動詞のみ」測定テストの集計結果（下表1）から、今回の調査対象となった被験者の中国語可能助動詞運用能力については、以下のことがいえると考ええる。

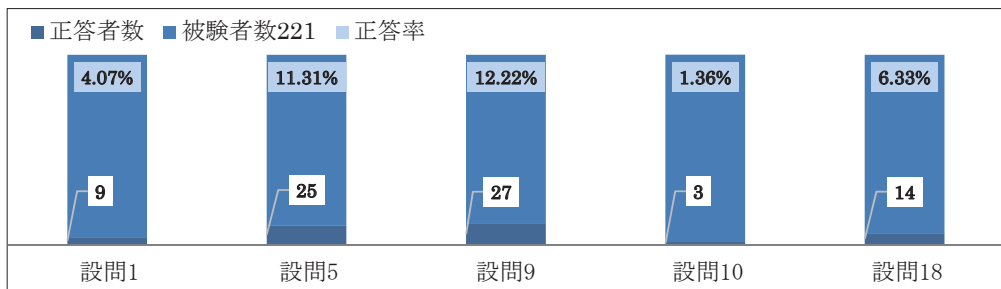
表1 可能表現測定テスト「助動詞のみ」集計結果（10クラス分、被験者総数221名）

	無効	無回答	A	B	C	D	AB	AC	AD	BC	BD	CD	AB C	AB D	AC D	BC D	AB CD	計	正答率
設問1	0	0	66	99	7	0	22	11	0	5	2	0	9	0	0	0	0	221	4.07%
設問2	0	3	82	60	33	15	6	6	2	2	4	3	2	0	3	0	0	221	37.10%
設問3	0	1	138	34	15	0	18	7	2	2	0	0	2	0	2	0	0	221	62.44%
設問4	0	0	89	15	73	7	5	22	1	4	1	0	2	1	0	1	0	221	40.27%
設問5	0	1	7	114	64	4	1	1	0	25	1	0	3	0	0	0	0	221	11.31%
設問6	0	2	17	10	19	133	0	0	6	2	4	25	0	0	0	2	1	221	60.18%
設問7	0	4	54	84	28	41	1	1	2	1	2	2	0	0	0	1	0	221	38.01%
設問8	0	1	132	27	27	5	18	4	1	1	0	2	2	0	1	0	0	221	59.73%
設問9	0	1	42	76	41	1	27	16	0	8	0	0	9	0	0	0	0	221	12.22%
設問10	0	5	57	107	18	6	12	5	0	6	0	0	3	0	0	1	1	221	1.36%
設問11	7	2	29	14	28	83	5	1	12	4	5	22	1	0	0	5	3	221	37.56%
設問12	0	1	84	58	24	19	11	6	1	3	5	3	0	2	4	0	0	221	38.01%
設問13	0	0	8	86	87	17	0	0	0	13	3	6	0	0	0	1	0	221	38.91%
設問14	0	2	99	56	34	4	8	9	1	4	0	1	2	1	0	0	0	221	44.80%
設問15	0	1	7	22	9	158	0	0	2	2	18	1	0	0	0	1	0	221	71.49%
設問16	0	2	22	75	53	55	2	2	3	3	4	0	0	0	0	0	0	221	33.94%
設問17	0	3	38	68	54	42	0	0	2	7	5	2	0	0	0	0	0	221	30.77%
設問18	0	3	14	90	63	23	1	2	2	14	3	6	0	0	0	0	0	221	6.33%
設問19	0	2	35	90	35	37	2	5	4	3	3	4	1	0	0	0	0	221	40.72%
設問20	0	2	32	57	63	45	1	2	0	5	6	5	0	0	0	3	0	221	25.79%

3.2.2.1 正答率10%台以下

下表2で示している正答率10%台以下のものはいずれも複数正答問題で、単一正答問題と比べ、正答率が極めて低いことが伺える。

表2 正答率10%台以下（「助動詞のみ」）



たとえば、設問1「他()开车。彼は運転できる(A能, B会, C可以, D想)」は中国語可能表現のなかでもよく取り上げられる典型的な例文であり、助動詞“能”、“会”、“可以”のすべてを正答として選択すべき複数正答問題だが、正解したのはわずか9名(正答率4.07%)のみだった。なお、AのみもしくはBのみが正答として選択した被験者数を合わせると165名もいた。この要因として、「現行インプット」では「習得していることを表す」のが“会”、「能力や客観的条件を表す」のが“能”と記述しており、設問1にある「運転できる」を「運転技術を習得した」と捉えた被験者もいれば、「運転する能力がある」と認識した被験者もいたためだと考えられる。ここでは“可以”も使用可能だと判断した被験者が非常に少なかったことも明らかになった。

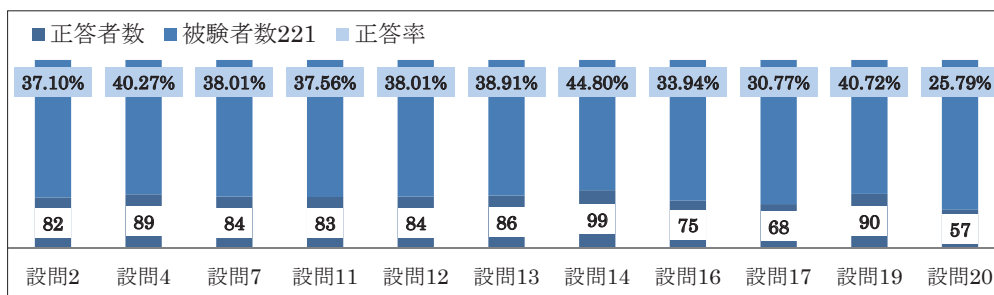
設問10「日文我只()说一点儿。日本語、私は少ししか話せない(A能, B会, C可以, D想)」も複数正答問題であるが、正答率はわずか1.36%(正答者数3名のみ)であった。ここで考えられる要因としては、「現行インプット」で取り上げる「～を話せる/～を話せない」といった用例の多くが“会”のみを用いたものであり、それが被験者に誤解を与える結果になってしまったことである。

設問5(正答率11.31%)、設問9(正答率12.22%)、設問18(正答率6.33%)についても、“能”、“会”のどちらも使用可能な文、あるいは“能”、“会”、“可以”のすべてを使用できる文であるが、正答率はいずれも低く、多くの被験者が可能助動詞“能”、“会”、“可以”が共通して使える言語環境を把握してないことが明らかになった¹⁰⁾。これは「指導内容によって誘発される誤用」の一例でもあると考えられる。

3.2.2.2 正答率20～50%

下表3から読み取れる問題点としては、“能”と“会”のどちらかを正答として選択させる設問で正答率が低かったことが挙げられる。

表3 正答率20～50% (「助動詞のみ」)



たとえば、設問2「今天下午,我()去找你吗?今日の午後、私はあなたを訪ねてもよいか(A能, B会, C要, D想)」は“能”が正答(正答率37.10%)であるが、“会”を選択した被験者が数多くいたこと、また反対に設問13「那个菜我不太()做。あの料理、私はあまり作

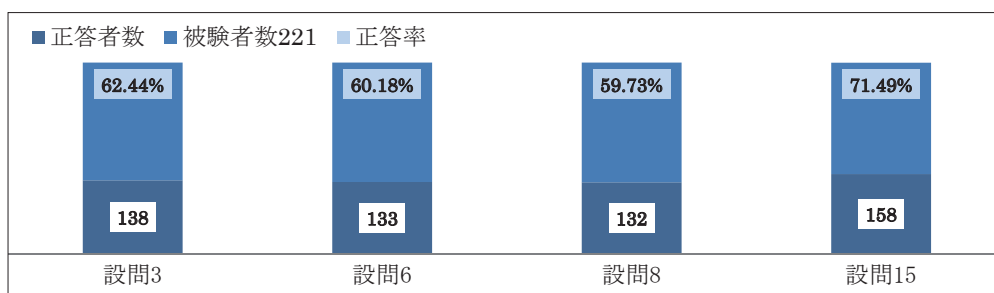
れない (A 愿意, B 会, C 能, D 可以)」は「会」が正答 (正答率38.91%) であるが、「能」を選択した被験者がほぼ同数いたことから、両者の用法の違いを正しく理解できていないことが浮き彫りとなった。

設問 7、12、16、17、19、20も同様の傾向 (否定形を含む) があることから、おそらく「現行インプット」では学習者が「能」と「会」の区別を十分に理解できておらず、その使い分けが難しいと感じていることがいえよう。これはまた日本語に可能助動詞の使い分けがないことも要因の1つとして挙げられるため、2.2で触れた誤用タイプ (「母語転移による誤用」、「目標言語の文法規則からの転移による誤用」、「学習ストラテジーによる誤用」、「指導内容によって誘発される誤用」) のすべてに該当する現象であると考えられる。なお、設問 4の「可以」と「不要」の混同については「学習ストラテジーによる誤用」に該当するものと思われる。

3.2.2.3 正答率50%台以上

下表 4は正答率が比較的高かったものを示しているが、これらはいずれも「可以」が単一正答となる設問であった。

表 4 正答率50%台以上 (「助動詞のみ」)



たとえば、設問 3「他病了, () 游泳。彼は病気だから、泳げない (A 不能, B 不会, C 不行, D 不想)」の正答率は62.44%と比較的高かったが、これは「現行インプット」において可能助動詞「能」、「可以」の否定は通常「不能」を用いるという記述がなされていることから、こうした結果に繋がったと考えてよからう。

また、設問 6「有什么不懂的 () 问我。わからないところがあれば、私に聞いてもいい (A 应该, B 会, C 能, D 可以)」 (正答率60.18%) から読み取れることは、「現行インプット」では「可以」の意味を「～してもよい、～してよろしい」と記述していることもあって、「能」や「会」との違いを学習者が理解するのにさほど難しさを感じていないという点であろう。設問 8 (正答率59.73%)、設問 15 (正答率71.49%) も「可以」の用法を問う問題でその正答率が比較的高かったことから、「可以」に対する理解度・定着度は全般的に高いと考えられる。こうした結果から、助動詞「可以」に関する「現行インプット」と教室指導には特段問題ないと判断してよからう。なお、上記設問のすべてで30%前後の不正解率があったことについては、

「学習ストラテジーによる誤用」によるものと考えられる。

3.3 「助動詞と補語」測定テストの結果とデータ分析

3.3.1 「助動詞と補語」測定テストについて

「助動詞と補語」の測定テストは、助動詞と補語の両者が使用可能となる言語環境における中国語可能表現運用能力を測定することを目的に、つぎの要領で作成した。

- ・中国語学習期間1年未満の学習者（中国語専攻）もしくは2年未満の学習者（第二外国語科目）を想定して作問した。
- ・「助動詞のみ」測定テストと同様、被験者の中国語運用能力をできるだけ如実に反映させるため、各設問の正解は1つだけとは限らないよう作問した。つまり、正解が選択肢のなかで1つだけのものと複数あるものを織り交ぜた（同様に前者を「単一正答」問題、後者を「複数正答」問題と呼ぶ）。

なお、可能補語の「現行インプット」については、多くがつぎのように記述している。

- ・動詞と結果補語または方向補語の間に“得”、“不”を入れて「可能」の意味を表す

この点を踏まえ、「助動詞と補語」測定テスト（15クラス分、被験者総数315名、学習状況としては週2コマのクラスを約20か月、あるいは週4-8コマのクラスを約10か月受講）の結果を集計したデータをもとに分析と考察を進める¹¹⁾。

3.3.2 集計結果とデータ分析

「助動詞と補語」測定テストの集計結果（下表5）から、今回の調査対象となった被験者の中国語可能助動詞及び補語の運用能力については、以下のことがいえると考ええる。

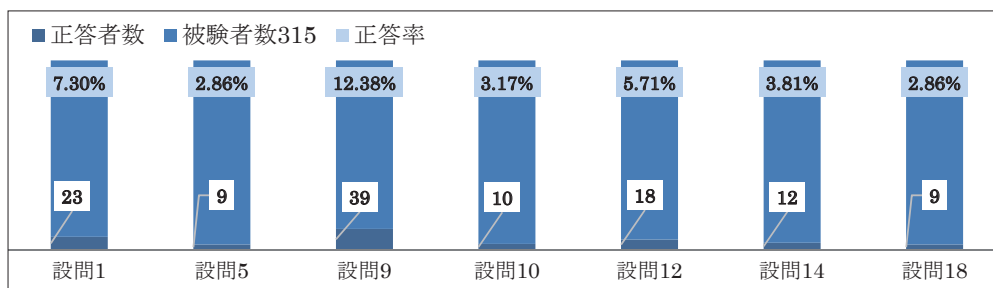
表5 可能表現測定テスト「助動詞と補語」集計結果（15クラス分、被験者総数315名）

	無効	無回答	A	B	C	D	AB	AC	AD	BC	BD	CD	AB C	AB D	AC D	BC D	AB CD	計	正答率
設問1	0	0	104	115	8	0	41	11	1	9	1	1	23	1	0	0	0	315	7.30%
設問2	2	1	108	96	52	28	11	2	3	5	2	3	0	2	0	0	0	315	34.29%
設問3	0	2	160	80	14	0	26	20	0	6	2	1	4	0	0	0	0	315	50.79%
設問4	0	3	166	18	80	3	13	24	2	4	0	0	1	0	1	0	0	315	52.70%
設問5	0	1	1	115	90	26	2	3	2	51	6	8	0	0	1	9	0	315	2.86%
設問6	0	5	29	14	16	204	0	0	8	0	12	23	0	0	1	2	1	315	64.76%
設問7	0	5	29	28	65	141	0	5	16	3	11	10	1	0	0	0	1	315	8.89%
設問8	0	2	220	30	19	11	22	7	0	3	0	1	0	0	0	0	0	315	69.84%
設問9	0	4	81	63	40	38	39	16	3	7	4	3	9	3	1	2	2	315	12.38%
設問10	0	2	95	136	19	3	31	11	2	6	0	0	10	0	0	0	0	315	3.17%
設問11	6	2	41	25	55	129	1	11	11	3	14	14	0	1	1	0	1	315	40.95%
設問12	1	2	20	31	152	64	1	8	3	7	0	18	0	1	1	6	0	315	5.71%
設問13	0	3	39	85	129	18	4	2	2	19	3	6	1	0	0	4	0	315	26.98%
設問14	0	1	131	81	38	24	11	11	12	1	3	1	0	0	0	1	0	315	3.81%
設問15	0	2	15	24	26	227	0	0	5	1	10	5	0	0	0	0	0	315	72.06%
設問16	0	2	102	118	39	14	16	18	1	1	1	1	2	0	0	0	0	315	37.46%
設問17	0	0	63	55	107	56	0	9	3	5	5	10	1	0	0	1	0	315	17.78%
設問18	0	1	77	78	62	37	23	10	1	9	7	1	8	0	0	1	0	315	2.86%
設問19	0	0	59	97	80	61	4	5	1	4	1	1	1	0	1	0	0	315	30.79%
設問20	1	2	58	46	162	18	2	6	1	9	3	5	2	0	0	0	0	315	14.60%

3.3.2.1 正答率10%台以下

下表6で示す結果から明らかになったことは、①複数正答問題で正答率が極めて低い、②学習期間が比較的長くなっている（あるいは学習時間が比較的多くなっている）にもかかわらず、可能助動詞を問う問題での正答率が上がっていない、③選択肢に補語が入ると正答率が極端に下がる、といった傾向が見受けられる点である。

表6 正答率10%台以下（「助動詞と補語」）



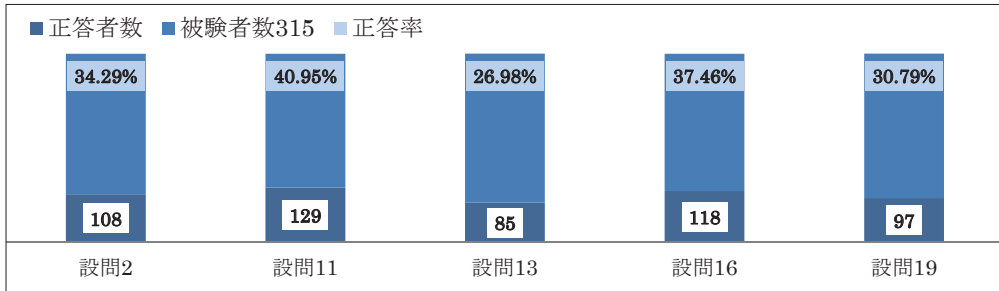
たとえば、設問1「他（ ）车。彼は運転できる（A能开，B会开，C可以开，D想开）」（正答率7.30%）は「助動詞のみ」測定テストと同じ設問内容だが、「助動詞のみ」の正答率4.07%と比べ、さほど変わらない結果となっている。学習期間が比較的長い（あるいは学習時間が比較的多い）学習者はおのずとその習得レベルが上がるものと予想していたが、今回の調査結果からはそうした傾向は認められず、むしろ「助動詞のみ」測定テスト結果と同様、“会”または“能”のみを選択した被験者が数多くいた。ここで検討すべきことは、3.2.2.1で指摘した「指導内容によって誘発される誤用」の問題点に加え、可能助動詞の運用能力を向上させるべく継続的な指導をしていく必要性である。

また、設問5「你（ ）汉语吗？あなたは中国語を話せるか（A应该说，B会说，C能说，D说得了）」（正答率2.86%）のように、助動詞と補語の双方を正答として選択させる複数正答問題での正答率が極めて低かった。設問5の問題文は「助動詞のみ」測定テストと全く同じで選択肢Dのみを可能補語に置き換えただけだったが、正答率が「助動詞のみ」の11.31%と比べ、極端に下がってしまった要因は、助動詞の“能”と“会”を正答として選択するだけでなく、補語も正答として選択しなければならなかったためであり、被験者にとってはやはり難易度が高かったようである。設問9、12、14に関しても全く同じ傾向が認められたため、「現行インプット」における補語の指導にはまだ大きな課題が残されていると判断してよからう。つまり、ここでの問題点に関しては「指導内容によって誘発される誤用」が最大の要因であると考えられる。

3.3.2.2 正答率20～50%

下表7が示す結果からは、学習期間が比較的長い（あるいは学習時間が比較的多い）にもかかわらず、既習内容の定着度が下がっていることが読み取れる。

表7 正答率20~50% (「助動詞と補語」)



たとえば、設問2「今天下午，我（ ）找你吗？今日の午後、私はあなたを訪ねてもよいか（A能去，B会去，C要去，D想去）」は実質的に「助動詞のみ」測定テストの設問2（3.2.2.2を参照）と同じ問題だが、正答率は「助動詞のみ」の37.10%から34.21%に下がっている。設問13と設問19についても同様の傾向があり、それぞれ38.91%から26.98%、40.72%から30.79%に著しく下がっている。こうした結果からも3.3.2.1で指摘したように、可能助動詞の運用能力を向上させるべく継続的な指導をしていく必要があると考える。

なお、設問11「请问，去电影院坐什么车？すみません，映画館に行くには何に乗ればいいか—（ ）公共汽车，也（ ）地铁。バスでも地下鉄でもよい（A应该坐，B会坐，C坐得上，D可以坐）」については、「助動詞のみ」の正答率37.56%から40.95%へとやや上がっている。「助動詞のみ」測定テストと同じ問題文ではあるが選択肢に補語を入れたため、難易度が上がっていること（つまり、正答率が下がること）が予想されたが、結果的に「助動詞と補語」測定テストでの正答率が微増した要因として考えられることは、助動詞“可以”が正答として選択肢にあったためであり、助動詞“可以”は学習期間が比較的長く（あるいは学習時間が比較的長く）なるにつれ、その理解度・定着度が上がる一例ともいえよう。また、ここからも助動詞“可以”に関しては「現行インプット」による学習が比較的有効であることが伺える。

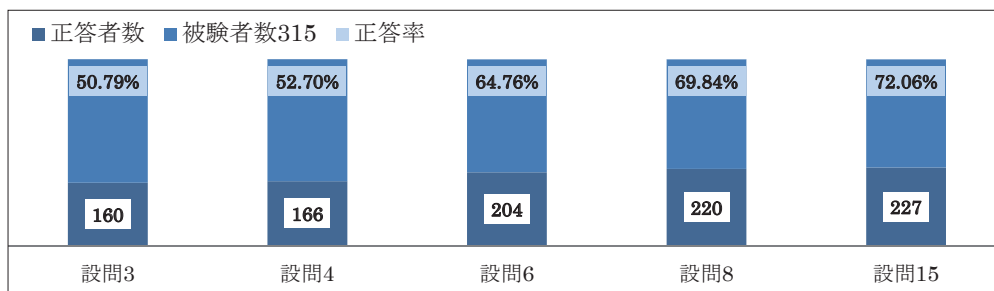
ここで興味深い結果が現れたのは、設問16「昨天走了很多路，我累得（ ）了。昨日たくさん歩いたので、私は疲れて立ち上がれなくなった（A不能站，B站不起来，C不可以站，D站不出去）」（正答率37.46%）である。後節3.3.2.4で取り上げる通り、補語を問う問題に関しては正答率が10%前後と非常に低かったことから補語の習得にはやはりまだ多くの課題があるとされるなかで、設問16の正答率は比較的高かった。この要因としては、おそらく日本語の「立ち上がれなくなった」を選択肢B“站不起来”と容易に関連付けられたことによるもので、母語が第二言語学習にプラスの働きをした結果だと考えられる。

3.3.2.3 正答率50%以上

下表8の設問4、6、8、15はいずれも助動詞“可以”の用法を問う問題で、「助動詞のみ」測定テストと同様、正答率が比較的高く、さらには「助動詞のみ」測定テストの結果より、正

答率が格段と上がっていた。この結果からも助動詞“可以”の習得状況は比較的良好であることが伺える。

表8 正答率50%以上（「助動詞と補語」）

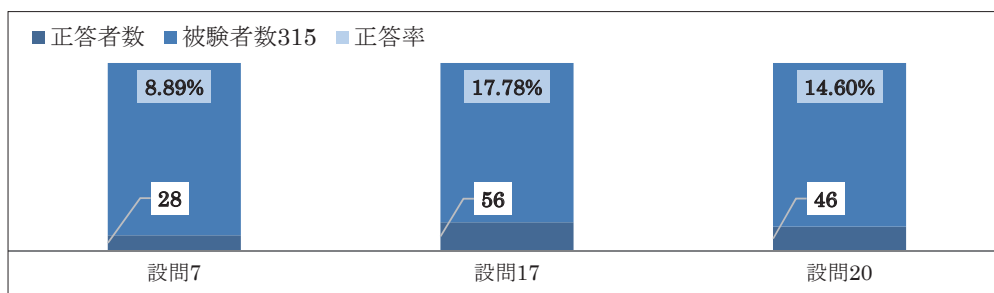


設問3については、実質的に「助動詞のみ」測定テストと同じ問題内容だが、正答率は「助動詞のみ」測定テストでの62.44%から50.79%に落ちている。この結果からも可能助動詞に関して継続的な指導がなされていない可能性が十分に考えられるため、3.3.2.1及び3.3.2.2でも指摘した通り、可能助動詞の運用能力を向上させるべく継続的な学習指導を推し進めるべきであると判断する。

3.3.2.4 正答率10%台

下表9で示している設問7、17、20はいずれも単一正答問題で、正答率が非常に低いことが伺える。

表9 正答率10%台（「助動詞と補語」）



たとえば、設問7「我已经饱了，（ ）了。私はもうおなかがいっぱい、食べられなくなった（A 不可以，B 吃不下去，C 不要吃，D 不能吃）」¹²⁾（正答率8.89%）は補語の習得状況を測定する問題だが、正答率が極めて低い結果となった。ここでは補語を正答として選択すべきところだが、可能助動詞を選択してしまった被験者が相当数いたことから、学習者にとって可能補語はやはり習得しにくい文法項目の1つであるといえよう¹³⁾。表9の通り、設問17（正答率17.78%）、設問20（正答率14.60%）についても同様の傾向が見られた。この点については、安本（2009：7）でも、中国語上級学習者が中国人との自然会話のなかで可能補語を使うべき

ところを助動詞形式の可能表現で発話してしまう実例が報告されている。また、盧濤（2006）では、“取代可能补语而滥用助动词的误用现象”（「可能補語の代わりに助動詞を濫用する誤用現象」筆者訳）が観察されている。

このように学習者（今回の調査対象となった被験者）の可能補語に関する習得状況が思わしくない最大の要因としては、可能補語が中国語特有の言語表現であり、またそれに相当する日本語表現がない故に日本人学習者がついその使用を避けてしまうこと（つまり、母語干渉による欠落）が挙げられよう。山田（2008：198）では、第二外国語として中国語を履修する1年生を対象にした可能補語の誤用例分析から、「1つには中国語そのものに対する理解不足、もう1つには、中国語と日本語の文法上の違い」にその要因があると指摘する。さらに、「現行インプット」での可能補語に関する取扱いが体系的でないといった問題点を指摘する学者もいる。本稿もこれらの意見や主張に賛同する立場にあり、学習者の可能補語に関する誤用については「母語転移による誤用」と「指導内容によって誘発される誤用」の両方に起因するものだと考える。

4 まとめ

今回の中国語可能表現調査及びデータ分析の結果から得られた初歩的な知見として、おもにつきのことが挙げられる。

(1)可能助動詞“能”、“会”、“可以”がすべて使える設問、または“能”、“会”がいずれも使える設問において誤用が非常に多い（つまり正答率が極めて低い。このおもな要因としては「指導内容によって誘発される」誤用が挙げられる）ことから、今後教科書指導で導入すべく「理解可能なインプット」に関して、これらが共通して使える言語環境を如何に記述するか、またどのような導入手法を用いるべきか検討する余地がある。

(2)可能助動詞“能”、または“会”のみが使用可能な設問についても誤用が非常に多い（ここでは「母語転移」及び「目標言語の文法規則からの転移」による誤用、「学習ストラテジーによる誤用」、「指導内容によって誘発される誤用」の4タイプがすべて該当する）ことから、今後導入すべく「理解可能なインプット」では、“能”と“会”の相違点についてもよりわかりやすい記述（文法説明）や用例が求められる¹⁴⁾。

(3)可能助動詞を選択するのか、あるいは可能補語を選択するのかを問う設問についても正答率が低い（このおもな要因としては「母語転移」による誤用と「指導内容によって誘発される」誤用が挙げられる）ことから、今後導入すべく「理解可能なインプット」では、両者の用法の使い分けに関する説明を明示することにより、問題解決を図ることができると考える。

(4)可能補語に関する設問では正答率が極めて低く（このおもな要因としては「母語転移」に

よる誤用と「指導内容によって誘発される」誤用が挙げられる)、ここではとくに学習者の母語である日本語による干渉の影響が大きい可能性も十分考えられることから、「理解可能なインプット」ではこの点を考慮に入れた、慎重な導入方法を検討していく必要がある。

(5)学習期間の長さと言得レベルの高さとの間に相関関係が見られなかった(3.3.2を参照)ことから、学習者の中国語可能表現運用能力を向上させるべく継続的な学習指導の必要性を改めて強く感じた。したがって、今後導入すべく「理解可能なインプット」では、それを1回きりの導入だけで終わらせるのではなく、導入後のフォローアップ教材開発も視野に入れておくことが望ましい。

陸俭明(2005)では、「何を教えるか」についてつぎのように主張する。「‘教什么’这主要根据三方面因素来考虑:一是汉语本身。二是汉语和母语在语法上的异同。三是学生在学习汉语过程中出现的语法毛病。」(『何を教えるか』(について考えるときに)は、おもにつぎの3点に配慮する必要がある。①中国語そのもの(の特徴)、②中国語と母語との文法的な相違点、③学習者が中国語を学習する過程で犯す文法的な誤り)(筆者訳)。これにしたがえば、本稿での調査結果及びデータ分析による考察によって、中国語可能表現に関して「何を教えるか(また、教えるべきか)」という点はある程度明らかにすることができたと思われるが、つぎの段階である「どう教えるか(また、教えるべきか)」(つまり「理解可能なインプット」の導入)については、本研究プロジェクト初年度に実施した中国語可能表現教授法に関する教員アンケートも引き続き精査しながら、今後提案していきたいと考える。

*本研究は、JSPS 科研費 17K02900の助成を受けたものです。

注

- 1) 本研究は、平成29~31年度科研費基盤研究(C)「現代中国語における可能表現の学習効果—導入及び習得データに基づく実証分析」(研究代表者:安本真弓、研究分担者:吉田泰謙)による成果の一部である。
- 2) “我们以往一直很重视教学研究,对学生怎么学习的研究重视不够。”(赵金铭2011:72)「われわれはこれまでずっと教授法に関する研究を重視してきたが、学習者が如何に学習するかに関する研究への関心が足りなかった」(筆者訳)。本稿はこの主張に賛同する。
- 3) 「横断的研究(cross-sectional study)」と「縦断的研究(longitudinal study)」に関する詳細は、白畑等(2010:201-202)を参照されたい。
- 4) 「インプット処理(input processing)研究」とは、「学習者が第二言語を処理するプロセスで、最初に行わなければならないことは、目標言語のインプットをリスニングおよびリーディングによって受け、その意味を処理(理解)することである。この最初のプロセスを重視し、そのメカニズムを明ら

- かにしようとする試み」(白畑等2010:136)を指す。
- 5) 本稿は、関西外国語大学国際文化研究所主催「第4回 IRI 言語・文化研究フォーラム」(2018年2月16日、関西外国語大学中宮キャンパス ICC)において口頭発表した内容に大幅な修正を加えたものである。
 - 6) 「誤用」は中国語で“偏誤”といい、齐沪扬(2009:362)の定義によれば、“偏誤是指第二语言学习者在使用语言时不自觉地对目的语的偏离,是以目的语为标准表现出来的错误或不完善之处。这种错误是成系统的,有规律的,反映了说话人的语言能力,属于语言能力范畴。”(「誤用とは第二言語学習者の言語使用時における無意識による目標言語とのギャップを指し、目標言語を基準として表出された誤り或いは不完全さである。こうした誤りは体系的、規則的で、話者の言語能力を反映したものであり、言語能力の範疇に属す」筆者訳)とされる。これは本稿の考え方と一致する。
 - 7) 今回の調査では、中国語教育に従事されている大学教員(氏名割愛)計13名(筆者の本務校である関西外国語大学、跡見学園女子大学を含む、計8大学)の方々にご協力頂いた。なお、今回ご協力頂いた大学教員には中国語可能表現教授法に関するアンケートにもご回答頂いたが、この分析についてはまた稿を改めたい。
 - 8) 今回の測定テストには中国語に関する学習期間、資格取得状況及び中国留学経験の有無等を記入する欄も設けていたが、紙面の都合上、付録では割愛する。
 - 9) なお、授業コマ数の多寡によって被験者間の学習内容に差異が生じている点について、本調査方法では測定テストの中国語にすべて日本語訳が付してあることに加え、被験者の中国語可能表現の習得にさほど影響を及ぼすものではないと考えるため、今回は考察対象外とする。
 - 10) 関西外国語大学国際文化研究所主催「第4回 IRI 言語・文化研究フォーラム」での口頭発表(質疑応答)の際に、数名の先生方より本稿と同じ問題意識を持たれていることをご教示頂いた。
 - 11) 注9と同様、授業コマ数の多寡によって被験者間の学習内容に差異が生じている点については考察対象外とする。
 - 12) 選択肢Aは本来“不可以吃”とすべきところを“不可以”で記載し調査を行ったが、被験者の解答及びその正答率に影響を及ぼすものではなかったと考える。
 - 13) 張文青(2011)でも、可能補語を含む補語の習得は中国語学習者にとって難関の1つであると指摘している。
 - 14) 松田(2015:25)では、「会」の用法を明示する際に“会得”という日本語を用いるのも有効である。つまり、『習得→会得→“会”』と連想させると使い分けが容易になる」といった教授法を提示している。

参考文献

〈日本語文献〉

- 鄧凌志(2013)「中国語の『可能補語』習得状況に関する一考察」『ポリグロシア』第24巻、立命館アジア太平洋研究センター、pp. 128-138。

- 白畑知彦、若林茂則、村野井仁（2010）『詳説第二言語習得研究—理論から研究法まで』、研究社。
- 張文青（2011）「中国語の『補語』教授法に関する試み」、『ポリグロシア』第21巻、立命館アジア太平洋研究センター、pp. 45-68。
- パッツィ・M. ライトバウン、ニーナ・スパダ著、白井恭弘、岡田雅子訳（2014）『言語はどのように学ばれるか—外国語学習・教育に生かす第二言語習得論』、岩波書店。
- 藤井玲子（2004）「中国語初級学習者の可能表現の習得に関する縦断研究と誤用分析」、『中国語教育』第2号、中国語教育学会、pp. 54-67。
- 松田春奈（2015）「日本人中国語学習者の誤用とその教授法・中国語の教科書の問題点について：可能・可能性を表す助動詞“能”と“会”を中心に」、『名城大学紀要（20）』pp. 15-28。
- 安本真弓（2009）『現代中国語における可能表現の意味分析—可能補語を中心に』、白帝社。
- 山田留里子（2008）「可能補語一何を教えるか」、『日本語と中国語の可能表現』、白帝社、pp. 187-210。
- レスリー・M. ビービ編、島岡丘監修、卯城祐司、佐久間康之訳（1998）『Issues in Second Language Acquisition-Multiple Perspectives 第二言語習得の研究—5つの視点から』、大修館書店。
- ロッド・エリス著、金子朝子訳（1996）『第二言語習得序説—学習者言語の研究』、研究社。

〈中国語文献〉

- 陈若凡（2002）〈留学生使用“能”、“会”的偏误及教学对策〉，《语言教学与研究》第1期 pp. 50-53。
- 盧濤（2006）〈汉语助动词使用错误分析〉、『広島大学大学院総合科学研究科紀要. I 卷, 人間科学研究』、広島大学大学院総合科学研究科、pp. 105-114。
- 陆俭明（2005）〈汉语作为第二语言教学中的语法教学和语法问题〉，《作为第二语言的汉语本体研究—世界汉语教学与研究丛书》，北京大学出版社。
- 孟国主编（2011）《对外汉语十个语法难点的偏误研究—实用对外汉语教学丛书》，北京大学出版社。
- 齐沪扬主编（2009）《对外汉语教学语法》，复旦大学出版社。
- 王建勤（1994）〈中介语产生的诸因素及相互关系〉，《语言教学与研究》第4期 pp. 105-120。
- 《学汉语》编辑部编（2012）《外国人汉语学习难点全解析（第一册）》，北京语言大学出版社。
- 张丽（2008）〈留学生“会”与“能”的使用情况分析〉，《暨南大学华文学院学报》第3期 pp. 53-58。
- 赵金铭总主编、姜丽萍编著（2011）《汉语作为第二语言课堂教学》，北京大学出版社。
- 周小兵、朱其智、邓小宁等著（2007）《外国人学汉语语法偏误研究》，北京语言大学出版社。

付録資料 I

中国語可能表現（助動詞のみ）に関する小テスト

問1～20について、それぞれ日本語に合うと思われるものを四択からすべて選び、○で囲んでください。

- 1 他（ ）开车。（彼は運転できる）
A 能 B 会 C 可以 D 想
- 2 今天下午，我（ ）去找你吗？（今日の午後、私はあなたを訪ねてもいいか）
A 能 B 会 C 要 D 想
- 3 他病了，（ ）游泳。（彼は病気だから、泳げない）
A 不能 B 不会 C 不行 D 不想
- 4 教室里（ ）吸烟。（教室ではたばこを吸ってはいけない）
A 不可以 B 不会 C 不要 D 不想
- 5 你（ ）说汉语吗？（あなたは中国語を話せるか）
A 应该 B 会 C 能 D 想
- 6 有什么不懂的（ ）问我。（わからないところがあれば、私に聞いてもいい）
A 应该 B 会 C 能 D 可以
- 7 天气预报说明天（ ）下雨。（天気予報では明日雨が降るようだ）
A 愿意 B 会 C 能 D 可以
- 8 餐厅里（ ）打电话吗？（レストランの中で電話を掛けてもいいのか）
A 可以 B 会 C 要 D 想
- 9 现在（ ）看电视。（今テレビを見ることができる）
A 可以 B 能 C 会 D 愿意
- 10 日文我只（ ）说一点儿。（日本語、私は少ししか話せない）
A 能 B 会 C 可以 D 想
- 11 请问，去电影院坐什么车？（すみません、映画館に行くには何に乗ればいいか）
——（ ）坐公共汽车，也（ ）坐地铁。（バスでも地下鉄でもよい）
A 应该 B 会 C 能 D 可以
- 12 我想去买东西，你（ ）和我一起吗？
（私は買い物に行きたい、あなたは私と一緒にいくことができるか）
A 能 B 会 C 要 D 想
- 13 那个菜我不太（ ）做。（あの料理、私はあまり作れない）
A 愿意 B 会 C 能 D 可以
- 14 他妹妹只有十块钱，（ ）去了。（彼の妹には10元しかなくて、行けなくなった）
A 不能 B 不会 C 不行 D 不想
- 15 我（ ）玩手机吗？（私は携帯をいじってもいいか）
A 愿意 B 会 C 想 D 可以

中国語可能表現の習得状況に関する考察

- 16 她想请王老师吃饭, 不知道王老师() 答应?
(彼女は王先生にご馳走したいが、王先生が応じてくれるかはわからない)
A 应该不应该 B 会不会 C 想不想 D 可以不可以
- 17 你还没有去过法国, 怎么() 瞎说呢。
(あなたはフランスに行ったことがないのに、どうしてでたらめを言えるのか)
A 愿意 B 能 C 会 D 应该
- 18 你() 等我回来吗? (あなたは私の帰りを待つことができるか)
A 愿意 B 能 C 会 D 应该
- 19 这次聚会很重要, 他() 不来的。(この集まりは重要だから、彼が来ないことはなからう)
A 不行 B 不会 C 不要 D 不想
- 20 即使没有机会了, 他也() 轻易放弃。
(たとえチャンスがなくなっても、彼は簡単にあきらめないだろう)
A 不行 B 不会 C 不能 D 不想

付録資料Ⅱ

中国語可能表現(助動詞と補語)に関する小テスト

問1~20について、それぞれ日本語に合うと思われるものを四択からすべて選び、○で囲んでください。

- 1 他() 车。(彼は運転できる)
A 能开 B 会开 C 可以开 D 想开
- 2 今天下午, 我() 找你吗? (今日の午後、私はあなたを訪ねてもよいか)
A 能去 B 会去 C 要去 D 想去
- 3 他病了,() 泳。(彼は病気だから、泳げない)
A 不能游 B 不会游 C 不行游 D 不想游
- 4 教室里() 烟。(教室ではたばこを吸ってはいけない)
A 不可以吸 B 不会吸 C 不要吸 D 不想吸
- 5 你() 汉语吗? (あなたは中国語を話せるか)
A 应该说 B 会说 C 能说 D 说得了
- 6 有什么不懂的() 我。(わからないところがあれば、私に聞いてもいい)
A 应该问 B 会问 C 能问 D 可以问
- 7 我已经饱了,() 了。(私はもうおなかがいっぱい、食べられなくなった)
A 不可以※ B 吃不下去 C 不要吃 D 不能吃
- 8 餐厅里() 电话吗? (レストランの中で電話を掛けてもいいのか)
A 可以打 B 会打 C 要打 D 想打
- 9 现在() 电视。(今テレビを見ることができる)
A 可以看 B 能看 C 会看 D 看得懂

- 10 日文我只()一点儿。(日本語、私は少ししか話せない)
A 能说 B 会说 C 可以说 D 想说
- 11 请问,去电影院坐什么车?(すみません、映画館に行くには何に乗ればいいのか)
——()公共汽车,也()地铁。(バスでも地下鉄でもよい)
A 应该坐 B 会坐 C 坐得上 D 可以坐
- 12 你学了两年汉语了,这篇文章你()吗?
(あなたは中国語を2年間習ったが、この文章を読んでわかるのか)
A 能看 B 会看懂 C 看得懂 D 能看懂
- 13 那个菜我不太()。(あの料理、私はあまり作れない)
A 做得出 B 会做 C 能做 D 可以做
- 14 他妹妹只有十块钱,()了。(彼の妹には10元しかなくて、行けなくなった)
A 不能去 B 不会去 C 不行去 D 去不了
- 15 我()手机吗?(私は携帯をいじってもいいか)
A 愿意玩 B 会玩 C 玩得来 D 可以玩
- 16 昨天走了很多路,我累得()了。
(昨日たくさん歩いたので、私は疲れて立ち上がれなくなった)
A 不能站 B 站不起来 C 不可以站 D 站不出去
- 17 太贵了,可是现在不买以后就()。(本当に高すぎるが、今買わないと後で買えない)
A 不会买 B 买不起 C 不能买 D 买不到
- 18 你()我回来吗?(あなたは私の帰りを待つことができるか)
A 可以等 B 能等 C 会等 D 等得来
- 19 这次聚会很重要,他()的。(この集まりは重要だから、彼が来ないことはなからう)
A 不行不来 B 不会不来 C 不能不来 D 不想不来
- 20 上个星期厕所坏了,()水,真急人。
(先週トイレが壊れてしまい、水が流せなくて、本当に焦った)
A 不会冲水 B 冲不下 C 不能冲 D 冲不去

※注12を参照。

(よしだ・ひろあき 英語国際学部准教授)

(やすもと・まゆみ 跡見学園女子大学准教授)